観光文化

Tourism & Culture

VOL. 183 2007 May

財団法人日本交通公社

特集◎ 昭和は遠くなりにけり

◆巻頭言

〈昭和〉ふたたび　海野　弘……①

◆特集

- 広島平和記念資料館と今　前田 耕一郎……②
- あの頃の東京タワー
  —昭和三十年代、四十年代を振り返りつつ　佐藤紀雄……⑥
- 昭和レトロ商品の魅力やいかに　串間　努……⑩
- わが昭和の街並みに復活を期する
  —富士山・人・レトロなまち下吉田　渡辺　博……⑭
- 「昭和の町」による観光・商業の一体的振興
  —大分県豊後高田市・草の根の社会起業家たち　山口泰久……⑰

◆連載

Ⅰ　あの町この町　第21回

トラとキツネ — 香川県・三豊市 仁尾　池内　紀……㉒

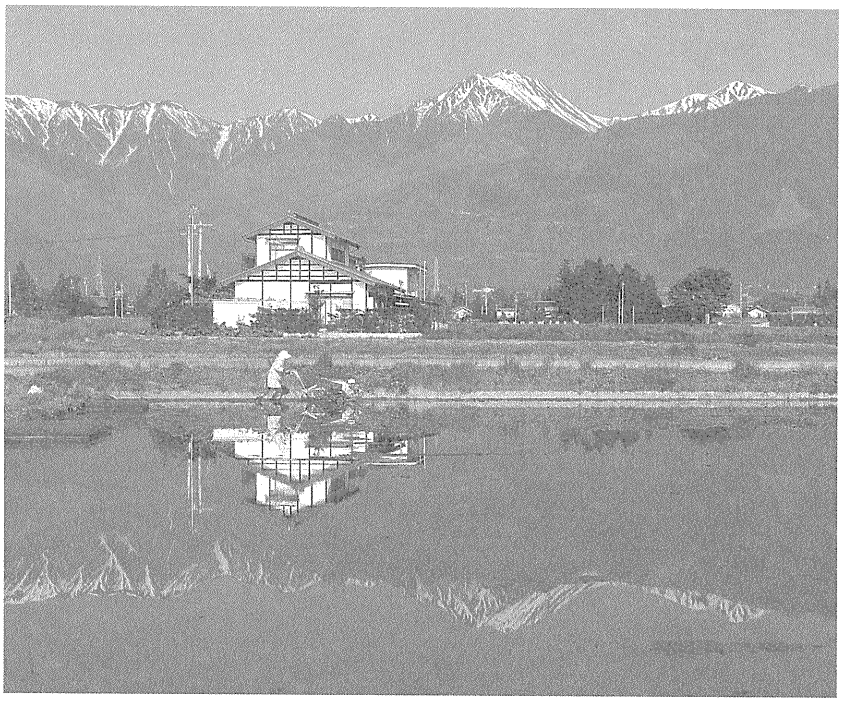
Ⅱ　岩倉使節団に嵌まって30年　第６回　最終回

「現代語訳」の出版、ＤＶＤの制作、そして「国際シンポジウム」　泉　三郎……㉘

Ⅲ　ホスピタリティの手触り 42

外資系リョカンがやって来る　山口由美……㉚

◆新着図書紹介……㉜



田園風景・安曇野

常念岳をはじめ三〇〇〇メートル級の山並みを有する信州・穂高町（現在、安曇野市）は田園都市を標榜するだけあり、「光と水と緑」の風景が眩しく映える。特に北アルプスを源とする清らかな水は多くの河川がつくった扇状地の末端に湧水をもたらし、今や全国にその名を馳せる「大王わさび園」は観光名所として年間二〇〇万人の観光客を集める。

わさび生産高は静岡に並び称され全国市場の主流を占める。安曇節に「一夜穂高のわさびとなりて、京の小町を泣かせたや」と歌われるほどだ。市の三分の二は山麓が占め、残り三分の一は松本平一の水田が広がり、秋には黄金色に輝く信州の米どころでもある。

私は早朝の安曇野を撮影したくて車を走らせていると、鏡のような田の水面に北アルプスと民家の白壁がくっきりと映える、じつに心地よい光景に遭遇した。しかも農婦が田植機を動かし始め、心おどる思いでシャッターを切った。一幅の水彩画を見る清々しさであった。

（写真・文　樋口健二）

巻頭言

〈昭和〉ふたたび

評論家　海野　弘

私は〈二十世紀〉とはなんだったかをふりかえり、ようやくまとめたところだ。なぜふりかえりたいと思ったかといえば、〈二十世紀〉をその最後の十年ぐらいしか知らない、という若い人たちが出てきたからだ。

〈昭和〉は、〈二十世紀〉の中核となる時代であるが、それを知らない世代が育ちはじめている。〈昭和〉を知り、そこに生きてきた人たちは、それを次の世代に伝えなければならない。いや、伝えたい、と私は思うようになった。

では〈昭和〉とはどのような時代であったろうか。〈昭和〉のはじまった一九二〇年代は、日本が世界の近代に本格的に参加し、〈モダン都市〉が成立した時代であった。私は最近、東京の庭園をいくつかまわる機会があったが、昭和期の庭園では、近代化、西洋化の中であらためて、日本庭園の魅力が再発見されていることを知った。

〈昭和〉というのは、西欧のモダニズムを日本と融合させる実験が行われた時代ではなかったろうか。日本の近代文化がつくられるようになったのである。世界と日本との関係が問われていた。

しかし、その実験は、第二次世界大戦で中断してしまう。昭和の庭を調べていて、戦争の直前まで、日本庭園をめぐる日米の文化交流があったことを知った。

戦争が終り、日本がやっと復興をした一九五〇年代、〈昭和〉は、あらためて、中断していた文化的実験を復活し、それをやっと開花させたのではないだろうか。それが〈昭和三十年代〉である。そこでは西欧モダンと日本文化の一つの融合がなしとげられていたのであり、私たちが今、その時代を、一方でなつかしく、また一方で〈若い世代には〉新鮮に感じられるのは、新しいものと古いものとが絶妙なバランスをとっているからではないだろうか。

〈昭和〉の終りは、〈戦後〉の終りでもあった。さらに戦後だけでなく、戦前、戦中を含む〈昭和〉の文化の一つの終りであり、新しい時代に入った。

そして新しい時代のために、〈昭和〉とはなんであったか、そこでつくられた、豊かで魅力的な文化をふりかえり、次の世代に送っていかなければならない。

〈昭和〉という失われた時の記憶を、いきいきとした姿と流れのうちにとりもどしたいと私は願っている。

（うんの　ひろし）

昭和は遠くなりにけり

平成の御世になってすでに一九年目。昭和は遠くなりにけりの感を深めているが、今、各方面で改めて昭和というニアレトロの時代が問い直され注目されている。今号では戦後を中心に、昭和とは如何なる時代であったのかを振り返るとともに、昭和をキーワードに地域振興に取り組む各地の活動などを紹介する。

特集1

広島平和記念資料館と今

広島平和記念資料館 館長
前田 耕一郎

はじめに

五五二一万八二一一人。この数字、何だかお分かりですか。答えは、広島平和記念資料館が昭和三十年（一九五五）に開館してから昨年度までの五二年間の入館者数です。現在、日本の総人口は一億二七七〇万人。乱暴な言い方ですが、その半数に近い人数が資料館を訪れていることになります。このところの年間入館者数は一二〇万人前後で、その四分の一は修学旅行の団体。広島平和記念資料館は原爆被害の実相を伝え、核兵器廃絶と世界平和の実現に寄与することを目的とした施設です。そうした施設の入館者数として大いに評価できる数字ではないでしょうか。

ところで、昭和二十年八月十五日に終戦を迎え、それ以降、日本は一度も戦争をすることなく今日に至っています。「遠くなりにけり」という昭和の時代の中で、終戦直前に広島、長崎に引き起こされた惨劇は忘れてはならない出来事です。

また、被爆者が今なお後遺症で苦しみ、あるいは、いつ発症するか知れぬ不安を抱えながら生きていること、さらには、核兵器が依然として存在し、拡散さえ進んでいて、人間に対して使用される可能性を振り払えない状況が続いているということは、広島平和記念資料館が単に過去の出来事を展示しているのではなく、現在の問題を扱っているということでもあります。だからこそ、多くの人々が訪れるのだと思います。

広島平和記念資料館建設の経緯

広島市中心部の賑やかな地域からほど近いところに位置する広島平和記念公園。元安川と本川に挟まれたこの一帯、中島地区はかつて城下町の時代から続いた繁華な街で、劇場、飲食店、旅館などが軒を連ねるとともに、由緒ある寺社や人々の暮らす住宅も建ち並ぶ地でした。北端には川を隔てた両隣の地区とこの地とを結ぶT字型の橋が架けられていました。

平和記念公園全景。中心が平和記念資料館（本館）、右側が東館

昭和二十年八月六日午前八時十五分、広島デルタのほぼ中心に位置するこのT字型の橋、相生橋を目標に原子爆弾が投下され、付近の上空六〇〇メートルで爆発。爆心直下ともいうべき中島地区は壊滅。広島の街は灰燼に帰し、年末までに一四万人前後が亡くなりました。

かろうじて生き延びた人々は悲惨と混乱の極みの中から自らも障害を抱えながら再出発しなければなりませんでした。この頃から、苦しい生活の中、被爆資料の収集を始めた人がいました。市民の協力によって集められた資料は昭和二十四年に市の中心部にある公民館の一室で公開が始まります。「原爆参考資料陳列室」と名付けられたこの部屋は「広島平和記念資料館」の前身ともいうべきものでした。

現在の平和記念資料館（本館）は平和記念公園の南端に昭和二十六年から建設が始まり同三十年に開館しました。一階部分は柱だけのいわば高床式となっており、館の南側を東西に走る幅一〇〇メートルの平和大通りから公園への門の役割を果たすとともに、公園中央の原爆死没者慰霊碑が見通せるようになっています。

その後、数度にわたり大幅な改修が行われ、平成六年には東隣の平和記念館が平和記念資料館東館として改築されて加わり現在に至っています。

展示方法・内容の推移

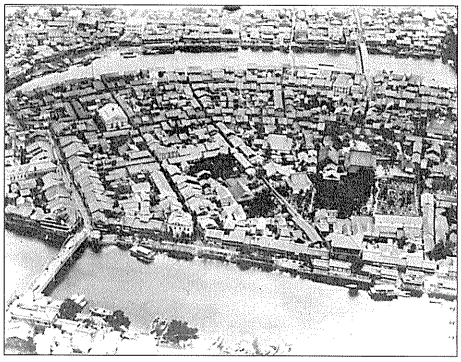
開館したばかりの資料館の展示は、コンクリートの床に展示ケースや写真パネルが置かれただけの簡素なもの。展示の仕方は洗練されているとはいえませんが、見る人を引きつける力強さがありました。

その後、「原爆の悲惨さを伝えるのに役立つのなら」と、大切にしてきた肉親の遺品が寄せられるなどして次第に展示が充実していきます。資料館には今日もなお、新たな遺品が託されます。その背景には「私がいなくなったら家族の誰も由来が分からないから」などと関係者の高齢化をうかがわせる事情も増えています。

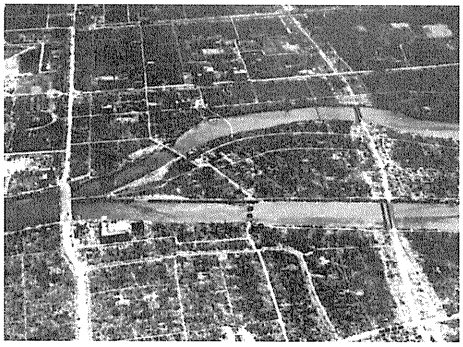
現在、東館では、被爆前から現在までの広島の歩みについて、原爆投下の経緯や世界の核兵器の状況をあわせ、主に写真や解説文などで紹介しています。つまり、広島の原爆被害について歴史軸を通して概略を知る場とい

えます。また、東館の地階では被爆体験者の証言、「市民が描いた原爆の絵」の展示、年二回の企画展などを行っています。

本館は被爆した品々や原爆で亡くなった方々の遺品を展示しており、広島の原爆被害、惨状を生々しく紹介しています。開館当初のいわば簡素な展示から、原爆の破壊力を「熱線」「爆風」「放射線」といった要素で具体的に分かりやすく示す展示に変わり、被爆から生き延びた人々を後々まで苦しめる後遺症についても紹介しています。原爆がたった一発で都市とそこに暮らす人々を滅ぼし、さらに後々まで人々を苦しめる憎むべき兵器であることを如実に示しています。



被爆前の中島地区（野口巌氏提供）



被爆後の中島地区。左側に写るのが相生橋

本館の展示室を出ると、北側に大きく開けた窓越しに平和記念公園が見渡せます。ここからは原爆死没者慰霊碑、原爆ドーム、さらには茂った木々の向こうにビル群も望見できます。先に記したように、この地はかつて賑わいある人々の暮らしの場でした。それが原爆で完全に潰え去り、今は平和を祈る空間になっています。この地の下には今なお、建物の遺構などが眠っていて、平和記念公園そのものが「被爆前」、「被爆」、そして「現在」と続く歴史を学ぶ装置ともなっており、ビル群は原爆の惨禍から復興を遂げた広島市民のたゆまぬ努力を象徴してもいます。

館の将来計画

平和記念資料館は開館以来五二年が経過しており、建物それ自体や展示などに課題も生じています。また、被爆者の高齢化が進み、その体験を他者に語ることができる人が減少していますし、一方で戦争体験のない世代が人口の七割を占め、戦争や核兵器の恐ろしさを実感できない人が増加しているという状況があります。こうした中、平和記念資料館の果たす役割はますます重要になっており、このような課題への対応策について、今年一月、「広島平和記念資料館更新計画」としてとりまとめたので紹介します。

まず、建物についてです。平和記念資料館（本館）は昨年七月に戦後の建築物としては初めて、国の重要文化財に指定されました。建物の文化財としての価値だけでなくそこで行ってきた活動も認められたように思えて喜んでいます。建物の老朽化が進んでいますが、重要文化財に指定されたことを受け、今後もその価値を損なわないよう建物を保存しながら活用していかなければなりません。

また、展示については平成六年に東館を加えて大幅な拡充を行い、その後放射線による被害の展示や原爆投下の経緯に関する展示を改修するなどしてきていますが、いくつかの課題もあります。まず、展示を見る順序についてです。現在の観覧順序は東館を見て次に本館に進むというものです。

しかし、東館の展示は文章による解説や図表を多用していて観覧に時間がかかり、遺品などの実物資料を中心とした本館の展示に十分な時間が割かれていない状況があります。このため、最初に本館の展示を見てもらうように展示の動線を見直します。

また、平和記念資料館を訪れた人は展示を見て衝撃を受け、さまざまな感情を抱きますが、現在はそれを整理したり、平和について考えたりすることが十分にできないまま、館を後にしています。このため、展示を見た人が、たとえば、感情を整理し、それを文章や絵などで表現したり、原爆や平和に関する情報を入手したりできるような場の充実を検討します。資料館の展示の基本は原爆被害について分かりやすく伝えるということであり、資料の特性を生かした効果的な展示手法を考えることが第一ですが、仮想映像などを活用した新たな展示手法も検討していきます。

さらに、被爆体験証言活動についてです。これは被爆者が、自身の被爆当時のことやその後の歩み、さらには平和についての思いなどを語るもので、広島における平和学習の特徴的なメニューです。原爆を身をもって体験した人の存在自体が圧倒的な迫力を持ちますし、その人が語る体験談は聞く人の胸を強く打ちます。しかし、被爆から六〇年以上が経過した今、被爆者の高齢化が進み、被爆者自身が語り伝えるということが、今後、次第に困難になっていくと予想されます。このため、短期的には証言者の発掘とサポートを行っていきます。また、中期的には、被爆体験のない人が証言活動を担っていくことを検討しなければなりません。

原爆被害の悲惨さ、平和の大切さを幅広く訴えるにあたり、これからを担う若い世代に関していうと、当館の入館料は修学旅行などの場合は無料としていますし、館の概要を紹介する子供向けのハンドブックなども用意しています。また、外国の人々に関しては展示の解説を日英併記としており、原爆被害の概要を紹介するパンフレットは計一五の外国の言語を、音声による展示解説は一六の言語を用意。館のホームページは日英のみですから、少しずつ対応言語を増やしていくことが今後の課題です。

結び

平和記念資料館の役割について記すとき、現在の世界の核兵器を巡る状況を見るにつけ、館に展示している惨状は、今現在も核兵器の使用によって生じ得ることを考えないわけにはいきません。六〇年以上も前の出来事でありながら、核兵器が使用される危険性、可能性が今なお続いているということは、じつに歯がゆく残念なことです。被爆者は言います。「他の誰にもこんな思いをさせてはならない」と。だから、彼らは、核兵器は決して使われてはならない、そして廃絶されなければならないと訴えるのです。ごくごく普通の市井の人でありながら、そのように語る彼、彼女たちの気高さに胸を打たれますし、同時に普通の人をしてそのように言わしめる原爆被害の凄まじさを思います。

世界中から核兵器がなくなり、平和記念資料館が過去にあった惨劇を今に伝えるところに、そして、そのようなことを引き起こす兵器を人類が捨て去ったことのモニュメントとしての役割を果たすところになる、その日が一日も早く来ることを心から願っています。

あれから六一年が経過して美しい街に復興した現在の広島を多くの人が訪れ、平和の大切さとともに、廃墟から立ち上がった広島の人々、人間の持つ素晴らしい力にも触れて欲しいものです。（まえだ　こういちろう）

あの頃の東京タワー
――昭和三十年代、四十年代を振り返りつつ

日本電波塔株式会社 常務取締役
佐藤 紀雄

親子三代そろっての東京タワー

東京タワーが昭和三十三年（一九五八）十二月二十三日に正式開業してから、二〇〇八年で五〇年が経とうとしています。それだけの長い時間が経ってもなお、小説や映画、テレビドラマの人気もあり、二〇〇六年には年間来塔者数が再び三〇〇万人の大台を超え、総来塔者数も同年九月二十九日に一億五〇〇〇万人を記録しました。

かつて、昭和三十年代、四十年代の東京タワーは観光のメッカといわれるほどの最盛期で、個人のお客様も多かったのですが、修学旅行とともに農協や靖国参拝団、企業のご招待などの一般大型団体のお客様も目立ちました。当時は、はとバスのお客様も年間五〇万人ほど来塔していましたが、近年では、個人のお客様がかなりの割合を占めています。昔と比べて団体旅行の規模が小さくなりましたし、そもそも団体よりも個人で楽しむ、という旅行スタイルが多くなってきているのでしょう。

最近のお客様の中には、何年ぶり、何十年ぶりかに来塔された方や、お子さんやお孫さん連れの方も少なくなく、親子三代そろって東京タワーに昇られる方もいらっしゃいます。今までは関東、特に東京にお住まいの方は、いつでも行かれるとお考えになるのか、地方の方と比較してあまりおいでになっていただけなかったのですが、ここ数年では個人のお客様は首都圏の方が多くなっています。近年、東京タワーの全面リニューアルが完了して生まれ変わったことや、小説などによる影響も大きいと思います。

私は営業職に長く就いていたので、旅行客が小口化・個別化していくのを、肌で感じていました。新幹線が開通して移動が便利になったことに加えて、スキーをはじめとする、多様なレジャーを誰でも手軽に楽しめるようになったということや、海外旅行にも行きやすくなったこともあるでしょう。修学旅行については、その後、少子化で学生さんが少なくなってきたことも理由の一つでしょう。

昭和三十年代の旅行スタイルを思い起こして

昭和三十年代から四十年代は、今と違って旅行シーズンが非常にはっきりしていました。三月の春休みからゴールデンウィークを経て、六月の初旬まで。学校が休みになる八月。そして、秋。十月を中心に九月後半から十一月初旬まで、という具合でし

た。

戦後復興が進み、昭和二十年代後半から経済が立ち直ってきて、国民の間に多少のゆとりが生まれていたのでしょう。旅行というひとつの楽しみが誰にでも持てるようになったといえます。

そんな時代に東京タワーは開業したので、当初のお客様の数はすさまじいものがありました。パリのエッフェル塔を抜いて三三三メートルの世界一の高さといった話題性や注目度といった要素も大きかったでしょうが、やはりそういった時代背景が大きな要因だったと思います。

旅行をするから服を新調する、という方もいたようで、真新しい服を着ていたり、ピカピカの靴を履いていたり。男性では、おしゃれな中折れ帽を被った方もいました。当時の旅行には、観光名所を回るということ以外に、そういう楽しみもあったようです。

東京観光で立ち寄る場所は、修学旅行の場合、皇居、国会議事堂、東京タワー、羽田空港というコースが多かったようです。それから、銀座、上野を回り、浅草から国際劇場へ行って踊りを見たり、という旅程でした。そういう観光名所の中のひとつに東京タワーが組み込まれていました。

また、宿に戻って食事をした後に、買物もできる、ネオンも見られるというわけで、バスでの夜の観光も多く、当時人気のあった銀座のネオンを見学して東京タワーまで足を延ばすというパターンもありました。宿から往復で大体二時間ぐらいになるので、夜の外出にはちょうどよかったのです。

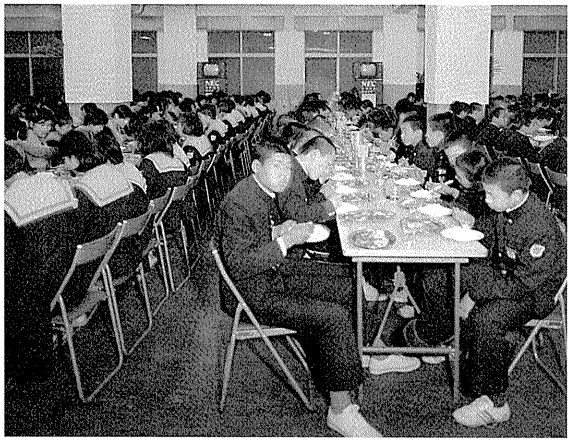
そのように、朝から晩まで、ともかくいろいろな所を多く回って楽しむ、というのが、当時の旅行スタイル。当然、かなりのハードスケジュールでしたが大事なのは、「旅行に行った」、「どこに行った」、ということでした。

それがだんだんと、「どこでどんなことをした」、「どういう目的で行った」、ということが大事にされてくるようになってきました。回るスポットは事前によく吟味して、旅行を「余暇」として満喫する、という風に旅行スタイルが移り変わってきているのでしょう。

東京タワーの塔脚を背にした当時の観光バス

その応対にてんやわんや、修学旅行

修学旅行は、戦争で中止されていましたが、昭和二十年代後半になると本格的に再開されだしました。そして、昭和三十七年


食堂で食事をする修学旅行生

頃から四十一年頃は、ちょうど団塊の世代の修学旅行の時期と重なります。ですから、大変多くの学生さんが全国を移動することになりました。

修学旅行は、学業に支障をきたさないようにするためでしょうか、春休みや夏休みに行う学校も比較的多く、それは世間の旅行シーズンとも重なりますので、見学箇所はどこも大変混雑しました。

当時の団体旅行は、一般団体も修学旅行も、五〇〇人程度の大型団体が多く、一学年が八〇〇人から一〇〇〇人規模の学校も特別珍しくなかったものです。三〇〇人以下の学校ですと、「小さい学校だな」という感じさえしました。もっとも、今では少子化ということもあり、一学年三〇〇人規模の学校は、かなり大きな学校でしょう。

そういう時代でしたから修学旅行生だけでも、一日にかなりの人数が東京タワーにやってきたのです。そこで問題になることのひとつが食事でした。団体食堂は当時、大食堂が三カ所ありましたが、三人がけのテーブルに四人で座っていただいたりして、何とか回転が早くなるようにしていました。当時はご飯を炊くのも食堂での自家作業でしたので、調理から片づけまで、食堂で働いている人は気が休まる暇がありません。

シーズン中の多い日には、朝、昼、晩で約一万食程度の食事を提供していたので、一つの学校でも、到着して先に食事をとるクラスと展望台に昇るクラスと二分していただいたりしました。展望台に昇るにも、エレベータが混んでいて、階段で昇っていただかざるを得ないこともありました。

修学旅行は、非常に多くの学生さんが長距離を移動するわけですから、移動手段は重要でした。車両の増結で対応したり、臨時列車を組んだり、春・秋の旅行シーズンなどには、需要の大きい東京～京都・大阪間の修学旅行列車専用のダイヤが組まれていました。

昭和三十年代初頭には修学旅行専用列車である「ひので」や「きぼう」が登場。これらの名前をご記憶の方もたくさんいらっしゃるのではないでしょうか。後には、東北や東海、山陽、九州からの専用列車も設定されるようになり、大変便利になりました。

それにしても、当時の修学旅行の添乗員さんは大変だったと思います。夜行列車（寝台車ではありません）対応で、車内での敷物やら飲み物やらを用意しなければなりません。今はないのですが、東京タワーのビルの二階出口前に二〇穴ほど、お湯が出る蛇口をつくっていまして、出発する前には添乗員さんは集乳缶に、生徒さんは水筒にお茶を入れて出発に備えていました。添乗員の皆さんとの共同作業も懐かしい思い出です。

昭和四十年代後半には、移動手段が新幹線へと移り変わってゆくにしたがい、専用列車はだんだんと姿を消していきました。

当時の街並み、風景

東京タワーが開業した頃、東京都内にはまだ高い建物がほとんどありませんでしたので、東京タワーはかなりの遠方や電車の中などからも大変よく見えていました。

当時、都内で目立っていた場所を挙げるとすると、皇居、国会議事堂でしょうか。今では周囲の建物が大変高層になってしまって、あまり目立たない面もありますが、あの頃、議事堂は非常に目立つ立派な建物だったのです。

逆に、東京タワーから地上の細かな部分もよく見えました。たとえば、浜松町駅から東京タワーへ歩いてきてくださる団体のお客様の長い列が見えたこともありました。当時、東京タワーへの来塔は、観光バス利用以外は、国鉄の利用がほとんどでした。東京タワーへの最寄り駅は浜松町で、東京タワー近辺へアクセスするには、地下鉄が通っていなかったこともあり、浜松町から都バス利用か、近くに見える東京タワーを目標に歩いて来られる人が多かったのです。

展望台から海の方を見ますと、東京港の埋め立てもそれほど進んでいませんでしたので、お台場や、行きかう多くの船を見ることもできました。昭和三十～四十年代半ばまでは、勝鬨橋も時間によって開閉していましたので、隅田川の方にも大型の船が通っていました。そのあたりにはまだ、工場や倉庫などが多く建ち並んでいたのです。夜ともなれば銀座のネオンがひときわ明るく輝いていました。

当時はホテルの数はまだそんなに多くはなく、旅行客が泊まるのは、旅館が主でした。今ではちょっと想像できないと思いますが、本郷、上野地区にはたくさんの旅館が集まっておりました。

この地域は各所へ出かけるにも便利だったので、東京での宿泊は、ほとんどが本郷、上野地区だったといっても言い過ぎではないと思います。

ただ、成長途上の時代だったからでしょうが、当時は狭い道路が多く、バスが通れないために旅行会社は苦労したようです。

そういった道路も、東京オリンピックの開催に向けて、拡幅工事が盛んに行われていました。加えて、まだ都電が多く走っていたこともあり、仕方ないことではありましたが、交通渋滞がとてもひどかったものです。

そのため、都内はトラックやバスの昼間の乗り入れ制限や主要道路の走行制限が、昭和三十年代半ばに実施されました。規制時間が解除されたあとの夕方四時頃になると、観光バスが東京タワーに一挙に到着し、アッという間に駐車場はほとんど毎日バスで埋め尽くされてしまっていました。夜の七時頃、ようやく最後のバスを見送るとホッとしたものです。

旅行シーズン中は、団体客がまったく途切れない日もありました。そういう日は、朝から晩まで東京タワー正面玄関に張り付いていなければなりません。それ以外にも泊まり込みでの勤務もありましたし、結果的に一カ月ほど休みを取っていなかった、などということもありました。思い返せば、なかなかきつい仕事でした。

しかしそれでも、昭和三十年代、四十年代は、私自身が若かったということもありますが、東京タワーが大変賑わっている楽しい時代だったということもあり、諸先輩とともに社員全員が頑張ってこられたのでしょう。時の経つのは早いもので、その東京タワーは来年十二月に満五〇歳を迎えようとしています。

（さとう　のりお）

特集3

昭和レトロ商品の魅力やいかに

有限会社日曜研究社 代表取締役
昭和B級文化研究家
串間 努

昭和の庶民文化が好きだ

お菓子のパッケージや、木造建築、寂れた遊園地、そして子ども遊び。モノやコトにかかわらず、庶民が消費した昭和の文化が大好きである。

もちろん自分が子ども時代であった昭和四十年代のものに特に愛着を感じるのだが、その理由は、「戦後」という時代の特質にあるといえる。

私は昭和三十八年生まれで、「デュアル世代」である。これは私の造語だ。「シンプル」な装飾デザインからゴテゴテとした「デラックス」&「デコレーション」へ。三世代一緒の「家族行動」や「集団遊び」から、「核家族」と「個室」へ。自然を主とした「伝承的わらべ遊び」から大量生産玩具中心の「モノ遊び」へ。このように高度経済成長時代がもたらした変化やテクノロジーの進歩によって、子どもの世界は様変わりした。和の伝統と洋の革新、そしてアナログとデジタル。新旧両方が混在している「ハイブリッド」文化を体験したのが、昭和三十五年～昭和四十五年生まれの世代なのだ。

私たちはガキ大将の指示にも従い、ゲームセンターでも遊んだ。この「デュアル世代」の共通言語、それは戦争体験や学生運動ではない。子どもの頃に親しんだ「商品」を主とするモノである。幼き日の失われたノスタルジーの対象は自然豊かな山や川でなく、団地生活やスーパーマーケット、TVCMにあるのだ。

昭和B級文化との出会い

「人間が作りだすあらゆるモノ」は全て文化だと思っている。

だが全ての文化が等しくスポットライトを浴びてきたか。「文学作品」である小説や「芸術作品」である絵画などは経年変化で古くなっても、国や大金持ちが経済的価値を見いだし、保存する。ところが、粉末ジュースやガムなど、大量生産消費社会で生みだされた商品たちは次々に生まれは消えの繰り返しだ。

芸術は確かに素晴らしい。しかし大衆商品にだって開発者のアイデアが込められている。コストの制約の中で工夫が凝らされ、パッケージデザインにも当時の社会文明が反映されている。商品は社会を映す鏡だ。例えば、グレープフルーツの輸入が自由化された年には、ガムや飴の分野でグレープフルーツ味の商品が輩出された。水泳帽が考案されたのは素材交代の中、ゴムのオムツカバーを作っている社長が頭にかぶってみて発想した。

青梅・昭和レトロ商品博物館全景

それなのになぜ、判りにくくて高価な学芸が珍重され、大量に生産される身近なものは研究・保存されない傾向にあるのだろう。

そこで私は学術文化・芸術など「優等生文化」の主流派と対比して、傍流を「B級文化」と名付け、大衆商品文化の栄枯盛衰を蒐集し記録してきた。

単純にレトロが好きだというアイデンティティによって昭和六十三年から研究発表した結果が、昨今のレトロブームとあいまって「昭和レトロブーム」現象を牽引した一人であるといわれているのはなんとなく面映い。研究者（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・菅原聡）によれば「昭和レトロ」という呼び方は一九九二年の『FLASH』誌が初出であるという。しかし急速に普及したとはいえず、雑誌メディアなどに頻出するのは二〇〇〇年以降だということで、「「昭和レトロ」という語の普及に関していえば、そのきっかけを青梅の昭和レトロ商品博物館の開館と好況に求めてほぼ間違いないものと思われる」（『昭和レトロブームの構築過程に関する一考察』より）とされている。

昭和レトロ商品博物館開館！

平成十一年十月二十三日、青梅に「昭和レトロ商品博物館」が私の蒐集した基本資料の展示を中心にオープンした。建物は元家具店で、商店街の空き店舗対策事業の一環である。もともとは、青梅の商店街の幹部が、「なにか空き店舗利用やイベントの良いアイデアはないだろうか」と相談にきたのが始まりであった。私は早速、「愛知と岐

館内の駄菓子屋展示コーナー

阜に明治村と大正村があるが、昭和村はどこにもない。青梅に昭和村を作りましょう」と提案した。しかし商店街全体の意見調整や予算などの問題で短時日にゴールできない。そのため、まずは中心基地として昭和に関する博物館を建設することにし、関連博物館を年に一館、二館と増やしていくという方針になった。商店街が昭和村構想を理解し賛同者が増えていき、結果として「昭和村」が自然にできあがれば幸いであると考えたのだ。

昭和レトロ商品博物館の特徴は、以下の三点にある。

一・パッケージは文化である

日本で初めて商品の包装に着目した博物館である。五〇年後の後世の人々のため、昭和が消費してきた商品パッケージを集積する機関が必要だと考えた。

二・情報集積基地の博物館になりたい

商品の現物をすべて集めるのは不可能であるから、アイテムを持っているコレクターの情報を集約し、人的資源のネットワークを張ることによって、独立した単館の博物館が陥りやすい欠点が補えるようにした。

三・コレクションの最終到着地

コレクターはいつか蒐集品を残して亡くなるが、遺族によりコレクションが理解されないまま適当に処分されてしまうことがある。当館ではコレクターが蒐集したコレクションを次世代に引き継ぐため、蒐集の功績を記念し、コレクターの名前を冠した「〇〇コレクション」として未来に残すことにしている。

街に張り巡らせた映画看板画とともに、青梅は昭和の街だという認識がメディアを通して浸透しつつある。現在では「赤塚不二夫会館」、「昭和幻燈館」と新たに二つの展示館がオープンしている。

人々はなぜ昭和に惹かれるのか

「今」を生きるひとには「現在」は日常であり、自分の心の中で特に価値があるものではない。時間とお金を消費する「瞬間」の積み重ねになっている。

日常の単調な連続だけでは「変化」を意識できない。ところが四〇年経ち、頭の中の記憶がなくなったものを、久しぶりに五感で感じると、非常に新鮮に見える。なぜかというと人間は「忘れる」からだ。多くの人々は生活におわれ、「去るものは日々に疎し」である。新しい人間関係、新商品の形や味を消費していくことは、前の声や形や匂いを忘れていくことである。忘れるから「ノスタルジー」という懐古の情感を持てるのである。忘れていないものは「今」と

同義であるから懐かしくない。古いものを見たときに脳裏に時代をさかのぼった記憶がよみがえるから、それを快感ととらえられる。大方の記憶は甘くて気持ちのよいものが中心だ。「思いだしたくもない」経験は頭のすみに伏せている。だからこそ昔の映像やパッケージデザインを見たときにリンクして想起されるのは大学時代に体験した甘美な恋愛シーンなどであり、ノスタルジーは快感となる。それが「昭和」であるのは、時代の近接性、つまり「ニアレトロ」

コカ・コーラ関係の展示エリア

だからに他ならない。明治や江戸は生活様式が異なりすぎる。現代との温度差が激しいと「歴史」になってしまってつまらない。昭和五十年を中心にして三〇年後の平成十七年と、三〇年前の昭和二十年を比べてみよう。前者は人々の服装や生活の基本はあまり変わってないが、後者は激変している。振幅が大きいから、高度成長時代は懐かしく慕わしい時代に見えるのだ。

これは日本人だけなのか。否、アメリカには「ベビーブーマー世代」向けのサイトや書籍があり、台湾には一九六〇年代を記念したレトロ施設「台湾故事館」がある。それぞれのお国のひとが懐かしがる時代や文物は異なるにしても、「レトロ」なものに対する懐かしさの感覚は等しく持っているといえる。

昭和レトロで町おこし

このような昭和の魅力を受けて、各地の商店街などはレトロをテーマとして地域振興を行っている。ツカサグループ代表川又三智彦氏は『昭和三十年代村計画』という参加型テーマパークを全国に設置するという。埼玉の川越では「古いものは恥ずかしい」という気持ちがあり蔵の窓をテントで覆い隠していたというが、いまでは蔵の街として観光地となった。本特集のテーマは「昭和は遠くなりにけり」であるが、遠くて近い昭和を題材にしたレトロ観光産業は、あと三〇年は集客能力があると私はみている。

私自身の展望や夢としては、全国のレトロ系博物館や展示館のネットワーク作りを進めたい。零細な個人博物館を含め、ゆるやかな団結をするのだ。その結果、ミュージアムショップで販売するオリジナルグッズを協同で製作できることでコスト削減が図れ、販売チャネルも複数化できる。また個人所蔵による展示物には限界があるから、リピーター客の確保が困難であるが、お互いの所蔵品を交換貸与して展示することでマンネリ化の問題が解消できる。

また、男性の観点によるレトロ施設が多いので、女性の思い出の視点による少女文化の懐古保存施設の設置も必要だ。徒手空拳ながらも実現に向けての提案を各方面に続けているところだ。

（くしま　つとむ）

連絡先：
sunday@cb3.so-net.ne.jp

わが昭和の街並みに復活を期する
――富士山・人・レトロなまち下吉田

富士吉田商工会議所 中小企業相談所 所長
渡辺 博

富士吉田市は、世界一といわれる秀麗な容姿を誇る富士山北面に扇状に広がり、近郊に富士五湖を擁する。富士山が市の南境にそびえ、静岡県と南北の裾野を分け合っている。政治・経済・文化などあらゆる面において周辺地域の中で重要な役割を担う富士北麓の中核都市である。

市街地は標高七五〇～八〇〇メートルの穏やかな勾配の上に発達しており、市域を東西に横断する国道一三七・一三八号、南北に縦断する国道一三九号を幹線として発展してきた。

昭和三十九年（一九六四）に富士スバルライン、昭和四十四年に中央自動車道の開通にはじまり、さらに平成三年の東富士五湖道路開通等で、都心からアクセスの良い観光・保養・レクリエーション地として高く評価されている。

下吉田まちづくりのきっかけ

一・住民による活発な地域活動

富士吉田市下吉田地区の中心商店街周辺は、牽引役となっていた繊維産業の衰退などを背景として空洞化が進んでいる。そうしたなか、下吉田地区では、〝下吉田に賑わいを取り戻したい〟との熱い思いを持った住民による活発な地域活動が行われていた。

本町大好きおかみさん会

下吉田地区の本町周辺には本町を愛し、大好きな〝本町大好きおかみさん会〟の活動がある。「セピア色の写真展」「どんど焼きナイトフィーバー」「一月遅れのひな祭り」など女性の感性を生かした独創的な事業を展開している。今ではあまり見かけなくなった〝かっぽう着〟に身を包んだおかみさんたちの元気な声が飛び交っている。

月江寺（げっこうじ）の池を綺麗にし隊

月江寺の池は富士山湧水群のひとつで、昭和三十年代にはボートを楽しむ住民で大いに賑わいを見せていた。月江寺の池を綺麗にし隊は、住民の憩いの場として愛着のある池のほとりにベンチやあずまやを設置したり、月一回の清掃活動を続けている。

まちがミュージアム

このイベントは、中心商店街の空き店舗をギャラリーとしたもので、〝まち〟を歩くきっかけづくりと、空き店舗の利用促進を目的に開催されている。この五年間で再利用された空き店舗のなかには地元の若者が経営する飲食店などもあり、マスコミにも取り上げられるなど注目を集めている。

二．まちづくりの組織的な取り組み

こうした住民の活発な活動や、下吉田地区の中心市街地に点在する「昭和」を感じさせる歴史的建造物、醸し出される雰囲気が、メディアなどにたびたび取り上げられるようになり、まちづくりへの機運が高まりつつあった。

そして、平成十七年十二月、富士吉田商工会議所常議員会において堀内光一郎会頭が、「”昭和レトロ“をキーワードに下吉田のまちづくりを」との提案を出すに至る。”わが昭和の街並みに復活を期する“、その思いに商工会議所を中心とした「下吉田まちづくり研究会」（会長：富士吉田商工会議所副会頭　小泉孝範氏）が直ちに組織され、「下吉田まちづくり事業」が本格的に動きだすことになった。

下吉田まちづくり事業の概要

「下吉田まちづくり事業」は、特に「昭和」の面影が今も残る下吉田地区の三商店街エリア（本町通り、月江寺通り、子の神通り周辺）を対象地区として、その活性化を目的としている。

商工会議所と商店会等が連携して、「昭和へタイムスリップ」をキーワードに、商店街の活性化と観光まちづくりに取り組んだ。具体的には、「まちづくりセミナー」（平成十八年八月）や「富士と昭和を楽しむ富士吉田まちめぐり散策会」（同九月）の開催などである。

これと並行して、平成十八年度に下吉田まちづくり研究会の下に組織された「調査研究部会」「ワーキング委員会」では、下吉田地区のまちづくりの方向性や具体的な施策を、「下吉田まちづくり基本構想」として取りまとめた。

ここでは、「富士と昭和を楽しむ富士吉田まちめぐり散策会」と「下吉田まちづくり基本構想」を取り上げて紹介しておく。

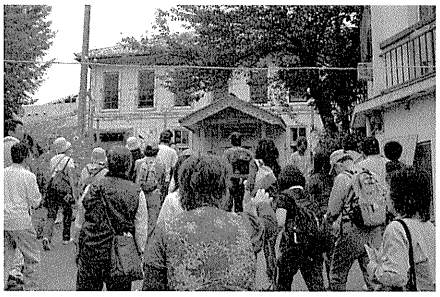
一．富士と昭和を楽しむ富士吉田まちめぐり散策会

雄大な富士を望み、昭和の街並みが散策

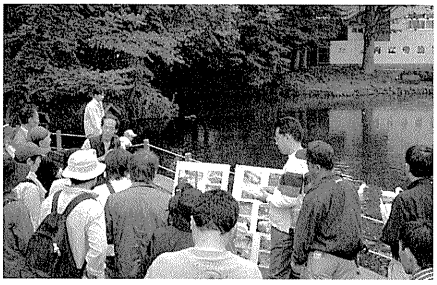
「富士と昭和を楽しむ富士吉田まちめぐり散策会」コース

1．10：00スタート：富士急行線 下吉田駅
↓（徒歩３分）
2．小室浅間神社
↓（徒歩２分）
3．旧下吉田町役場
↓（徒歩２分）
4．月江寺の池
↓（徒歩２分。月江寺商店街に入る）
5．旧角田医院
↓（徒歩２分。本町三丁目商栄会に入る）
6．子の神通り
↓（徒歩３分）
7．まつや茶房（店内見学）
↓（徒歩３分）
8．新世界通り
↓（徒歩１分。西裏通り、月江寺通りに入る）
9．月の江書店
↓（徒歩２分。本町二丁目商店街に入る）
10．富士吉田ユースホステル
↓（徒歩２分）
11．旧山一酒店
↓（徒歩２分。東裏通りを富士山に向かう）
12．絹屋町
↓（徒歩１分。月江寺通りに入る）
13．カフェ月光
↓（徒歩１分）
14．ゴール：中村会館

出発地点、下吉田駅での懐かしいガリ版印刷の制作風景



レトロな建物「旧下吉田町役場」


富士山湧水のひとつ“月江寺の池”

ウッチャンナンチャンの内村光良氏が監督した映画『ピーナッツ』にも登場した月の江書店

ワークショップの様子（筆者、写真右端）

できる地域は他にない。この街並みを県内外の人に見ていただきたいと、地元三商店会、本町大好きおかみさん会、行政、地元住民で構成される「ワーキング委員会」（委員長：富士吉田市商業連合会会長　五十嵐忠幸氏）を中心に、「富士と昭和を楽しむ富士吉田まちめぐり散策会」は企画された。

平成十八年九月十七日、総勢一八二名（一般参加者一五四名、昭和まちなみガイド十一名、研究会委員四名、ワーキング委員十三名）もの参加を得て、同散策会は大々的に開催された。

出発地点の下吉田駅には懐かしの軽三輪ダイハツ・ミゼットが置かれ、ガリ版印刷のデモンストレーションに数多くの人だかりができた。昭和まちなみガイド（ワーキング委員、市・商工会議所職員）の引率で、賑やかなうちに下吉田駅をスタートし、月江寺通りでは、昭和の味〝コロッケ〟に舌鼓を打ちながら、楽しみながら歩いた（散策会コース参照）。

二・下吉田まちづくり基本構想

平成十八年九月二十六日、学識経験者や国、県、市など行政機関、商店会の代表、地元企業関係者などから構成される「第一回調査研究部会」（部会長：高千穂大学教授　山本雄二郎氏）が開催された。平成十八年度内に三回開催され、活発な議論のもとに、下吉田まちづくりの今後の方向性、具体的な施策を取りまとめた「基本構想」が策定された。策定の過程では、四回にわたり開催された「ワーキング委員会」のワークショップでの議論が大きく反映されている。

同構想では、〝「昭和モダン」の風景に、人々が長い歴史のなかで築いてきた文化や暮らしぶりそのものの資源を生かした観光振興によるまちづくり〟を重点におき、その将来像を「富士山・人・レトロなまち下吉田～昭和モダンが育む夢・未来～」とした。この実現に向けて、下吉田地区活性化の最重要方策として、特に「ビギニングプロジェクト」（にぎわいづくり、風景づくり、みちづくり）が提案されている。

平成十九年一月三十日に開催された下吉田まちづくり研究会に、「下吉田まちづくり基本構想」は答申された。

今後、下吉田地区は、同基本構想で謳われた「富士山・人・レトロなまち下吉田～昭和モダンが育む夢・未来～」を目指して、官民が一丸となり、周辺地域との連携も踏まえて、取り組んでいく予定である。

（わたなべ　ひろし）

特集5

「昭和の町」による観光・商業の一体的振興

――大分県豊後高田市・草の根の社会起業家たち

知財開発投資株式会社 取締役 ジェネラルパートナー
山口 泰久

「昭和の町」で活気を取り戻す

豊後高田市は、大分県の国東半島西側に位置する人口二万六〇〇〇人の小都市だ。この町は、戦後しばらく商業都市として活況を呈した後、さまざまな要因から中心市街地の賑わいを喪失し、数年前までは地元商店街も惨憺たる状況であった。しかし、最近進められている「昭和の町」の取り組みを契機に、急速に活気を取り戻している。

「昭和の町」では、昭和三十年代の商店街をコンセプトの中軸に据え、観光と商業の一体的な振興を図っている。商店街の活性化のために、まずは観光需要を取り込んでいき、それをベースに、地元消費者の需要掘り起こしも同時に行っていくという考え方である。

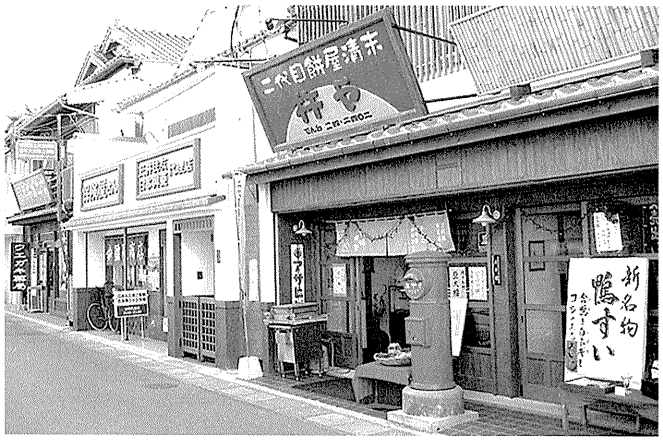
「住んで楽しい町が、訪れても楽しい町である」という考え方は、大分県では由布院から全ての観光地に拡がっており、豊後高田市でも基本的な考え方として肝に銘じている。「昭和の町」への来訪者・観光客は、事業を始めた平成十三年度のほとんどゼロの状態から平成十八年度は二〇万人を大幅に上回る驚異的な増加を達成し、「昭和の町」によるまちづくりの成果が顕れてきている。

「昭和の町」による観光&商業まちづくりの真髄

平成五年に、豊後高田商工会議所の金谷俊樹氏（現まちづくり会社所属）は、外部コンサルタントに委託した商業活性化調査の結果に失望し、自分たちで町の個性を探そうと、商工会議所の商業まちづくり委員会を中心に、町の歴史・商店街の歴史の調査を五年間も行った。

この調査の結果、近世城下町とか明治・大正の近代化遺産といった町の個性が一応浮かび上がってはきたものの、他地域との比較から考えると磨くべき町の個性が定まらず、関係者は相当悩んでいた。五年間も悩んだ末に、ふと金谷氏の頭に浮かんだのが、「昭和三十年代の商店街」だった。「昭和三十年代」という切り口で再度商店街を見直してみると、時代の波に取り残された豊後高田市の商店街が、突然お宝に見えてきたそうである。

そこで商業まちづくり委員会のメンバーは、平成十年から二年間、昭和三十年代をテーマに全国をくまなく調査、新たなまちづくりのコンセプトを市長に説明した。平成十二年には、市長から事業推進のお墨付きを得た形で、市、商工会議所、商店街の主要メンバーにより「商店街町並み実態調



建築再生。昭和の時代の懐かしい郵便ポストも

査」という「昭和の町」をコンセプトにしたまちづくりの原案を完成させ、翌十三年から事業を開始した。

「昭和の町」の取り組みの具体的な内容は、

一．昭和の建築再生（修景で街を当時に近づける）

二．昭和の歴史再生（店に残る歴史物を一店一宝として展示する）

三．昭和の商品再生（店自慢の昭和の商品を一店一品として販売する）

四．昭和の商人再生（商店主が本物の昭和の商人を目指す）

という四つの再生を「昭和の町」公認の商店に求めている。そして、この商店街再生ストーリーを語るボランティアの「ご案内人制度」の導入は、団体観光客の誘致に大きな力を発揮した。

建築再生は、昭和の町並みを復活させるという取り組みであるが、これは各商店の外装を昭和三十年代当時のものに戻していくものである。県や市から補助金は出るものの、建物の改修にはお金もかかるので、平成十三年の初年度はわずか九軒で開始した。しかし、毎年一〇店舗ずつ着実に増加させていった結果、現在は商店街一〇〇店舗中、三八店舗の商店が改修されている。

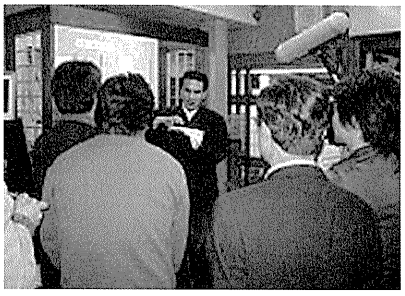
歴史再生は、商店を個別調査する中で、各商店が保有するお宝（各商店の思い出の品）を再発見していった。今では「昭和の町」各商店の店頭に「一店一宝」のお宝として展示されている。

商品再生は、昭和三十年代に売っていた商品やサービスを実際に再生し、「一店一品」として販売するものである。一日三〇〇〇個も売れる豊後牛のコロッケなど大ヒット商品もこの「一店一品」運動の中から生まれてきた。

商人再生は、商人魂の復活であるから、そう簡単に再生はできない。しかしながら、最

歴史再生。思い出の品々を展示

商品再生。店に代々伝わる昭和の商品


商人再生。昭和の商人魂の復活

近では、商店主の息子さん・娘さんが東京・大阪から帰ってきて商売を始めた、といった話が聞かれるようになった。Uターンはもちろんのこと、「昭和の町」のコンセプトにほれ込んだIターン組もいる。

このような四つの再生という商店街振興策に加えて、平成十四年には「昭和ロマン蔵」事業として、市所有の農業倉庫を改修し、まずは東蔵に「駄菓子屋の夢博物館」という博物館の誘致に成功した。このおもちゃ博物館は、「昭和の町」のイメージ作りと集客に大変なインパクトをもたらした。博物館の館長に就任した小宮裕宣氏は、もともと福岡在住で有名なおもちゃのコレクターであったが、豊後高田市の方々の熱意にほだされて、豊後高田市にコレクションを携えて移住してきたのである。

収蔵品は20万点を超える「駄菓子屋の夢博物館」

「昭和ロマン蔵」の開設により大きな集客装置ができ、商店街から博物館へという回遊路が完成した。その後「昭和ロマン蔵」では平成十七年に東蔵に「昭和の絵本美術館」を追加。平成十八年には南蔵にレストラン「旬彩南蔵」をオープン。平成十九年四月には、北蔵に昭和の暮らしを体験する「昭和の夢町三丁目館」も開設した。このような集客装置の整備は、観光まちづくりには必須であり、行政がどこまで協力できるかもポイントとなる。

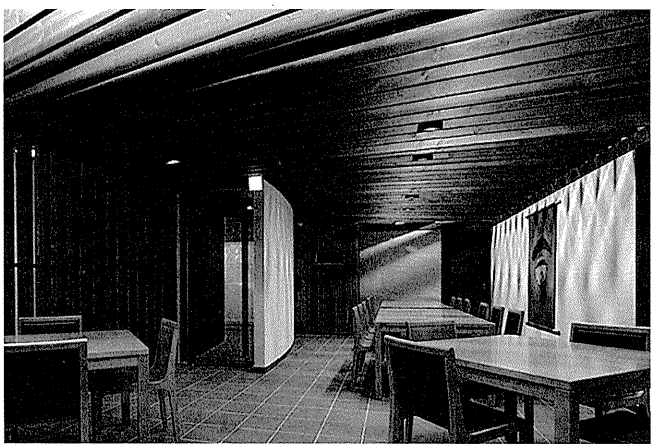
「豊後高田市観光まちづくり株式会社」による取り組み

さて、平成十五年くらいから、観光客が増加するのと同時にさまざまな問題が噴出してきた。

豊後高田市や商工会議所には、「昭和の町を構成する四つの商店街ばかりに注力する」とか、「あちらの道に観光客は通るのに、こちらには来ない」といったクレームが出た。また、「昭和の町」というテーマで一気にまちづくりを進めてきたが、このまちづくりが特定個人の力量に大きく依存しており、金谷氏は寝る間もないというような状況で対応の限界を迎えていた。私が、日本政策投資銀行大分事務所の所長として赴任したのは、ちょうどそのような時期だったのである。

私は着任早々、なぜ各地の商店街は実質的な空洞化対応策を打てないのか徹底的な調査を行った。この調査の最も重要な結論は、地域の商店街を一体的に運営する主体がほとんど機能していないということである。

商店街組合や商店街連合会は各地にあるが、事業を行う体制や資金調達体制が脆弱な場合が多い。大分県には、観光まちづくりの大先輩として有名な由布院があるが、牛喰い絶叫大会・映画祭・音楽祭など多彩なイベントを行っている由布院観光総合事務所ですら収入源には困っており、旅館組合会員の会費以外にどうしようかというこ


レストラン「旬彩南蔵」の部屋の一つ、伽羅

とで、国民宿舎の運営などを手がけるようになっている。

海外では、商工会議所や観光事務所が税金（地方消費税）を徴収できるシステムを確立していることも判ったが、日本では現状この策は取れない。とにかく先立つもの、収益源を確立しないと、観光まちづくりというフィールドで、ステップアップできないということははっきりしていた。

そこで私たちは、まず観光まちづくり会社を設立し、観光・商業を一体的に振興する主体とし、この主体を持続可能な形にするためにレストランを経営し、その収入を内部移転し、観光客の取り込みなどの観光振興事業と四つの再生という商店街の振興事業を行おうと考えた。このような内部補助の仕組みを内包する観光まちづくり会社を、豊後高田市と豊後高田商工会議所に提案したのである。この提案を、豊後高田市の永松市長、商工会議所の小畑会頭と野田副会頭には、極めて真摯に、かつ事業としてやろうという前向きな姿勢で受け止めていただいた。

このような内部補助の仕組みは、これまで各地で設立された第三セクターでも見られるが、じつは失敗ケースも多い。そこで、観光まちづくり会社の内部補助の仕組みとしていろいろな工夫を施した。また、失敗ケースの大半は経営者の欠如ということから、市長や商工会議所に対して、観光まちづくり会社の社長には民間の経営者を登用するようにお願いしたところ、紆余曲折を経て、商工会議所の野田副会頭が、自分がやるという決断をされた。ご自身の事業とは関係のない観光まちづくり会社の責任者を引き受けるわけであり、大変なご決断だったであろう。

以上のような経緯を経て、「豊後高田市観光まちづくり株式会社」は、平成十七年十二月に補助金受入の準備会社として設立。平成十八年四月に、商工会議所の野田副会頭を社長とし、日本政策投資銀行、地元企業、地元金融機関などの増資を受け入れ、資本金九五〇〇万円の企業として正式にスタートした。

観光まちづくり会社が設立されて一年以上が経ったが、どのような成果が上がっているのか。まずレストラン事業は、新宿割烹「中嶋」のノウハウ提供を受け、素材は大分のものを使った地元料理を提供するレストラン「旬彩南蔵」をオープンした。「旬彩南蔵」は、地元飲食店と競合しないように単価はやや高めに設定し、新たな地元需要を掘り起こすとともに、団体観光客の需要に対応している。

観光振興事業はどうか。観光まちづくり会社の職員が、企画ツアーなどのプロモーションを行うほか、TV・雑誌など各種媒体への広告企画を行っている。この結果、

「昭和ロマン蔵」の入場者数は、平成十七年度の一九万人から平成十八年度は二十三万人と約四万人の上乗せを達成した。さらに、現在では「昭和の町」に留まらず、広域観光ということで、国東半島一円に観光客を呼び込む企画を積極的に行っている。また、「昭和ロマン蔵」の北蔵には、今年の四月に「昭和の夢町三丁目館」を企画・開館させた。豊後高田市では、観光まちづくり会社の立ち上げに先立ち、平成十七年度から観光まちづくり推進室を設置。市役所の支援体制をはっきりと構築し、今では観光まちづくり会社とタイアップして、広域観光のプロモーションを官民分担して積極的に行っている。

「昭和の町」ご案内人と一緒に歩けば、町の魅力はさらにアップ

商店街振興事業については従来、市や商工会議所が行ってきた事業を受け継ぎ、四つの再生を推進することとなっている。

社会起業家たちのチャレンジはこれからも続く

私は、平成十五年に初めて豊後高田市を訪問し、金谷氏から豊後高田市商店街の実態をご説明いただいた。金谷氏の豊後高田を愛する熱血ぶり、商店街復活に賭ける気合いと実行力に圧倒され、こういう人がいるから町は再生していくのだと一人納得した。

このような「社会を良くしよう」と考え、思慮深く行動する熱い人たちを、「社会起業家」というが、社会起業家の厚みやネットワーク力が、地域の活性化の度合いと連動していることは、私の実感となっている。私の豊後高田市との関わりは、金谷氏との出会いに始まったが、永松市長、野田副会頭、小宮館長、商店街の方々、市役所の方々、商工会議所の方々、ご案内人の方々、社会起業家としての豊後高田市の皆さんの厚みという手応えが確かにあった。

私自身は、たまたま日本政策投資銀行大分事務所に配置されるという偶然に恵まれ、このような草の根の「社会起業家」たちと知り合い「昭和の町」プロジェクトに参画できたことは、本当に得がたい経験となった。そして、「豊後高田市観光まちづくり株式会社」が、豊後高田市の観光&商業振興を支える持続可能な主体として順調に軌道にのれば、こんなに喜ばしいことはない。

豊後高田市の「社会起業家」たちのチャレンジは今も続いており、これからも陰ながら応援していきたいと思う。

（やまぐち　やすひさ）

昭和の町ＨＰ：
http://www.showanomachi.com/index.html

〈参考文献〉
『おまち再生計画』日本政策投資銀行大分事務所・日本経済研究所（2004年）
『大分学・大分楽Ⅱ』辻野功編、明石書店（2005年）
『地域づくりにおける社会起業家の役割』日本政策投資銀行大分事務所（2006年）

連載Ⅰ
あの町この町
第21回

トラとキツネ――香川県・三豊市 仁尾

ドイツ文学者・エッセイスト
池内 紀
（イラスト＝著者）

香川県丸亀市の西かたに魚の尾ビレに似た半島が突き出ていて、先端の三崎にちなみ「三崎半島」、あるいは町名をあてて「詫間半島」ともよばれている。これを境に備後灘が燧灘と名が変わる。仁尾の町は半島の西のつけ根にあって、燧灘に面している。

丸亀を出たJR予讃線は、しばらく海沿いに走ったあと、半島を迂回するかたちで、観音寺市へ向かい、ついで、再び海と寄りそう。そのために仁尾町へ行くには、途中どの駅からもバスかタクシーのお世話にならなくてはならない。

観音寺駅前のバスターミナルで運よく仁尾バスに乗り合わせた。「運よく」というのは二、三時間に一本の便数で、日曜・祝日は全便運休。

「ゼンビンウンキュウ…」

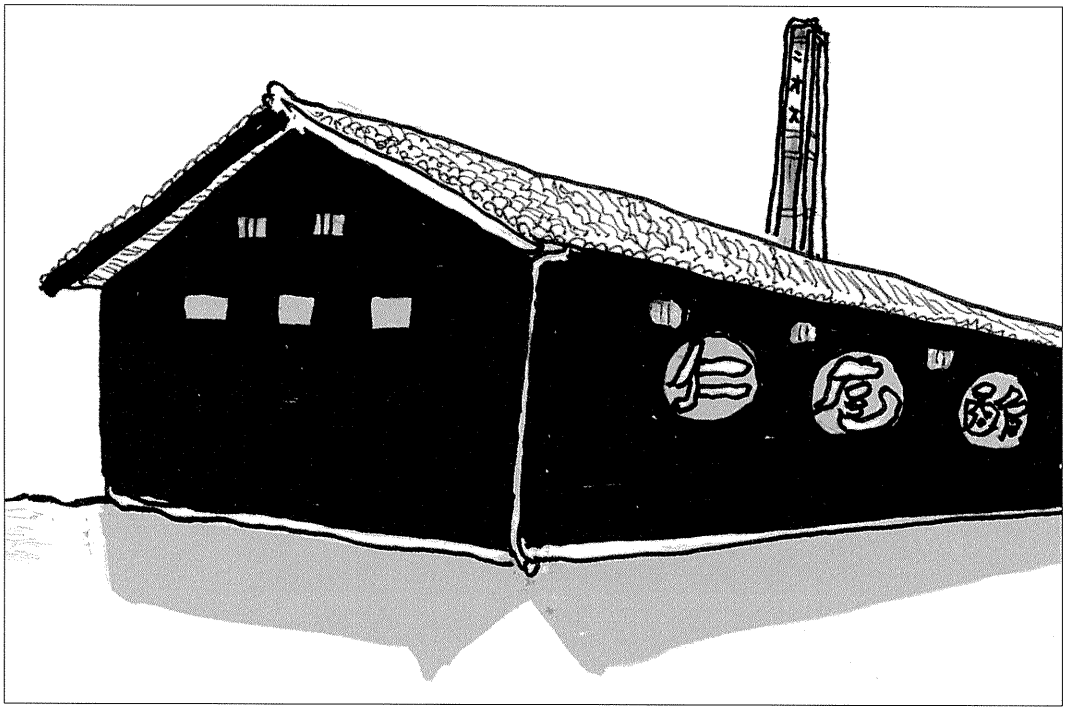
しばらく意味をとりかねてボンヤリしていた。休みの日はいっさい公共の足がない。おだやかな陽光をあびていると、冷酷な現実がウソのように思えて、すぐには呑みこめない。

小型のマイクロバスで、病院帰りというおばあさん三人、杖をもった老人と、両手に買物袋をさげた二人。運転手は町の職員らしく、ともども挨拶を交わしている。しばらく北へ走ると、四国八十八ヶ所の札所観音寺。そのあとまもなく海岸に出た。プルシャンブルー一色の海原がひろがっている。ポツリと小さいのが伊吹島。その向こうに円上島と股島。おだやかな海を形容して「鏡のような」というが、まさしく広大な鏡面を張りつめたぐあいである。

どうして「燧灘」の名がついたのだろう？　すぐ北は備後灘、西は来島海峡をはさんで安芸灘。ともに旧の国名によるなかで、ここだけが異色である。火打とも書いて、火打石で火を作り出す、あの「ひうち」だろう。海にどうして火がついたのか。

地理学では、東西約六〇キロ、南北約三〇キロ、水深一五～三〇メートル。横向きの楕円をした海域である。もしかすると瀬戸内海のなかでも、とりわけ水温の高いところではあるまいか。半島を四国北岸と島々に囲まれ、夏には海水が火を受けたようにあたたまる。わけても海風が吹き寄せる半島の根かたは、火打石を抱いたごとくなのだ。そういえば、かつて仁尾の町は塩田をもっていた。背後のゆるやかな山沿いを「曽保」といって、ビワやミカンがたわわにみのる。つまるところ燧灘の恵みを一身に受けてきた。

文化会館前が町の中心のようで、挨拶を



仁尾酢の蔵

交わしながら乗客が三方に散っていく。カラのバスが走り去った。頭上の太陽が眩しい。目をしばたきながら、ゆっくり辺りを見廻した。図書館を併設した文化会館のモダンな建物。前はひろびろとした広場。右手に重厚な瓦屋根と風格のある土壁、上に赤黒いレンガの煙突がのび、そこに少し褪せた「ニオス」の三文字。

フシギな小天地に佇んでいるような気がした。またしても意味をとりかねたここちでレンガの煙突を眺めていた。軒下のまっ黒な焼き板に、古風な「優美清酢」の看板があって、「ニオス」が仁尾酢だとわかるのだが、いぜんとして謎めいた暗号のようにも見える。

広場入口の隅に二メートルあまりの石柱があり、そこに勇壮な字体で「金壹萬圓　塩田忠左衛門」と刻まれている。右肩に小さく「本村寄金」。仁尾が町制をしいたのは大正十三年（一九二四）のこと。村の行政がつづいたのはその前だから、金壹萬円がたいへんな巨額であることが推測できる。名前からして塩の元締めが気前よく寄付したらしい。

本通りを少し行くと、辻に丸亀藩時代の高札場がそのまま残っている。かたわらに丸い井戸、上に石の蓋がのせてある。小広場のつくりなのは、藩の役人が出張ってきて、ここで村の年寄りたちに申し渡しをしたのではあるまいか。

天正年間のはじめというから一五七〇年代だが、当地の豪族細川頼弘が居城をかまえ、町づくりをした。だが、天正七年（一五七九）三月三日、土佐の長曽我部元親に攻められて頼弘は自害、城は焼き払われた。

江戸時代に入り仁尾は丸亀藩京極家の統治となった。藩の重役は半島のつけ根の恵まれた風土に注目したのだろう、町に酢、酒、醤油の醸造特権を許可して商業地とし

ての発展を図った。現在にみる家並みのみごとさからも、藩政の目の正しかったことがみてとれる。

キャリアを杖がわりにした人がゆっくりと、ひとけない通りを横切った。その向こうに石垣がのぞいている。かつての居城の跡のようだ。しんと静まり返った町並みを、自分の影を踏むようにして進んでいった。角の家の軒に一枚板で「張子とら」とある。手作りの張子のトラが名産の一つだ。粉末にした木クズで型をとり、和紙を張って色をつける。軒下の段ボールに脚や首や胴がそれぞれ区分して入れてある。風にあて陰干しで乾かすようだ。たとえ張子であってもバラバラの五体はへんにナマナマしいものである。

仁尾はまた「八朔人形」で知られている。春の節句に悲運の最期をとげた細川氏を悼み、土地の人はひな祭りをやめ、旧暦八月一日の八朔の節句を祝うことにして、以来、リチギにこの習わしを受け継いできた。仁尾の八朔まつりでは人形を飾るだけでなく、歴史上の人物やシーンにちなむ場をこしらえ、そこに人形を配置する。ヨーロッパのクリスマスには、受胎告知など聖書の名場面をつくり、そこに天使や聖母マリアの像を飾るつくりものがあるが、それとよく似たたのしい風習が、この町に根づいているわけだ。

かつての城の石垣にのぼると、町のつくりがよく見える。前は海に開いていて、背後は半島につづくゆるやかな山並み。黒瓦の家々のつらなりが海に近いところで、くっきりと直線をつくってとぎれている。仁尾港運河が走っていて、その向こうは新しい産業用にあてられた。この半島の根っこの町では、ずいぶん早いころに産業地と住宅地を分割して、快適な町づくりを実現した。

石垣をのぼりつめると、奇妙な一角に行きついた。広場の前が石づくりのひな段になっていて、そこにぎっしりと同じタイプの墓標が並んでいる。「軍人墓地」とよばれるもので、戦死した者たちの霊を一堂に集めた。

段ごとに墓譜がそえられ、地区名、氏名、死亡日、戦没地が刻まれている。

M三七・十一・廿四　旅順東鶏冠山
M三七・十二・一九　南満州真隷平野

日清・日露の戦死者はごく少ない。ひな段のおおかたを占めているのは、つぎのような死者たちである。

S十七・八・廿五　東部ニューギニア
S十七・十・三　比島バナイ島
S十七・十一・廿一ビルマ国ペグー西端
S十九・三・二一　比島ルソン島

ざっと目勘定で総数五〇〇。誰の発案で、どのような経緯あって実現したのか知らないが、はっきりとした意志表示がみてとれる。家族墓に葬るのではなく、個人の墓として一つをつくり、さらにそれを一カ所に集める。わが町から、これだけの者たちが国家の命令で戦地に赴き、無念の死をとげた。いかなる数字よりも、石を目で見て、その数に向き合うほうが、戦争の理不尽さ、それをやらかした権力の愚かさがよくわかる。軍人の位階に関係なく、すべて同じ墓石にしたところにも、しっかりした見方がつらぬかれている。

そういえば図書館入口の広いフロアが歴史資料室を兼ねていて、五月の節句の武者飾りなどとともに、人形芝居の頭、義太夫の太棹三味線、浄瑠璃本などが並べてあった。

「御祝儀献立心覚」

仁尾の料理人が書きとめていたノートで、町の大店の当主たちは、部屋の厄落としとか、門明け年賀の祝いごとに、けっこうな宴席をもうけていたらしい。そんな席では浄瑠璃のノド自慢が披露されたりしたのではあるまいか。

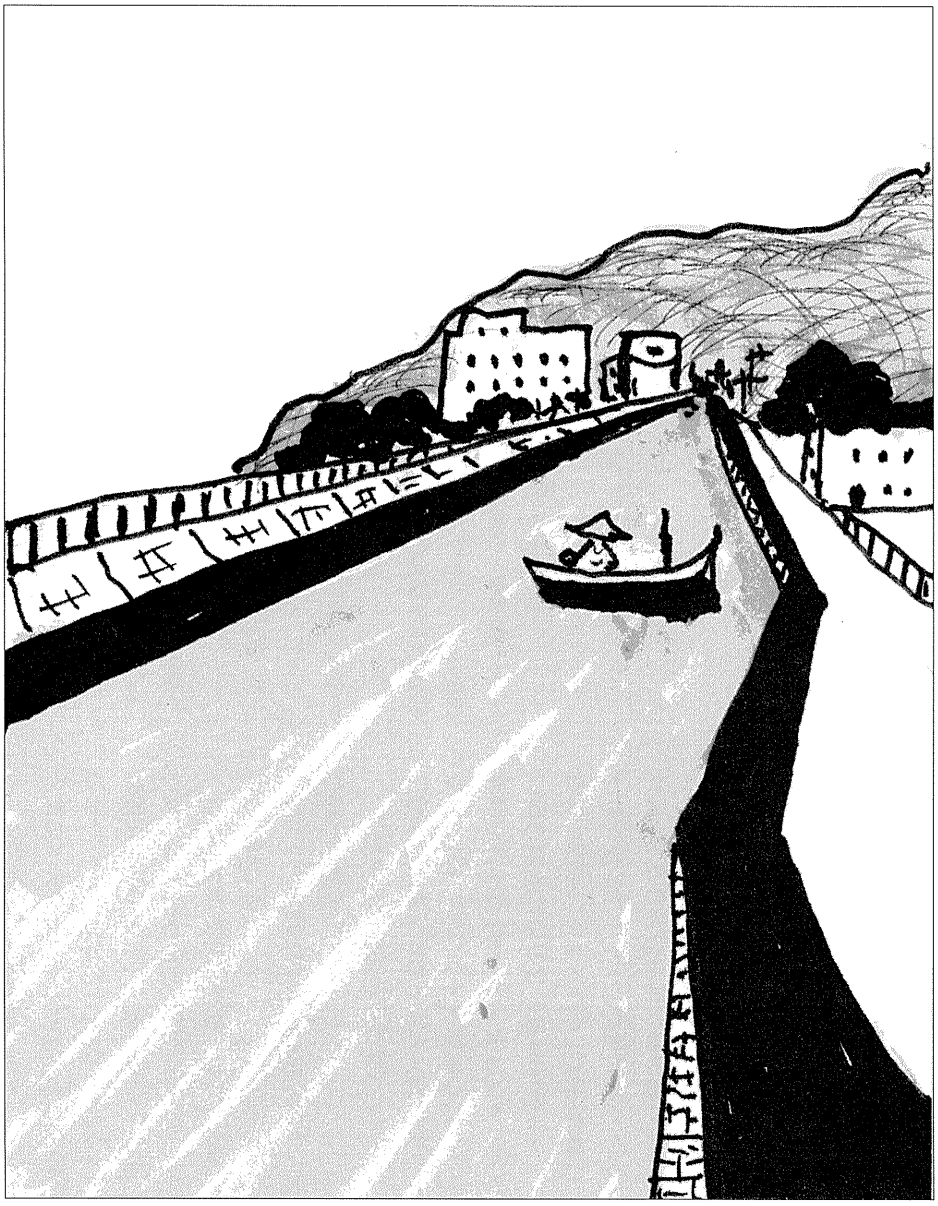
大人だけではない。子供たちにも季節ごとのたのしみがあった。たとえば秋は「亥の子石」であって、十月はじめの亥の日の

祝いごと。上が丸く下が平べったい石にヒモをつけ、それをもって歌いながら家ごとに廻っていく。亥の日のおいでっさん（恵比寿）という人は、

一に俵踏んで
二でにっこり笑うて
三で盃さしおうて
四で世の中ええように
五ついつものごとくなり……

めでたい歌のごほうびに、おひねりが出る。仁尾の賀茂神社の看板には「歴史と海人文化の発祥地」のそえ書きがついていたが、残された資料からも、かつてあったゆたかな海人文化がそこはかとなく匂ってくる。

北の端の仁尾港から、まっすぐ町の南端まで運河が走っている。西の海側は、現在は車エビの養殖地になっているが、以前はそこに塩田がひろがっていた。燧灘につき出すかたちでマリンレジャーの基地。ついで公園、郵便局、勤労者センター、木材貯蔵地、中学校、仁尾町役場。海側と山側



仁尾港運河

がくっきりと新・旧地区に分かれている。
　想像していたより太い運河で、幅約二〇メートル。水がきれいなのは流れこむ川が汚れていないせいだろう。堰堤のあちこちに三角の切りこみがあって、スロープと階段で荷上げができる。小船は港からそのまま町の中心部まで入ってこられる。トラック便に取って代わられるまで、水の帯はそれなりの機能をはたしてきたのではなかろうか。
　いま「仁尾町役場」と書いたが、これはマチガイで、現在は「仁尾支所」である。二〇〇六年一月、仁尾町を含む七町が合併して三豊（みとよ）市になった。「三豊」は旧の郡名。新市は半島をもつ詫間町から内陸部の財田町まで及び、面積では県都高松市に匹敵するほど広い。人口は計七万あまり。
　広報『みとよ』が「〝これまで〟からの脱却、そして、〝これから〟へ」の特集を組んでいた。市の「大いなる飛躍」のために行政改革推進本部を設置し、現状の把握と徹底した見直しに取り組むという。
「現在、三豊市は二四四施設もの建築物を有する公共施設を保有しています」
　あいまいな言葉でボカしてあるのが、今後の「行財政改革の指針」のなかで、きっとつぎつぎに消えていく。
「旧松下寿電子跡地有効利用に関しても、株式会社イズミとの土地売買交渉の方向が決定されました」
　大型ショッピングセンターが建設される。町々の店は、なおのことカンコ鳥が鳴くだろう。
「コミュニティバス事業については……」
　新しく十二の路線が決定したというが、「日曜・祝日は全便運休」については、ひとことも触れられていなかった。
　いま全国の市町村で同じような「行財政改革大綱」がつくられている。それらを集め、主な項目を抜き出すと、判で捺したように同じフレーズが並ぶはずだ。
　財政の健全化
　効率的な行政運営
　公共施設等の適正配置
　総人件費の削減
　……
　半島の漁業の町から四国山脈にかかる山の町までが、一つの行政でくくられる。「平成の大合併」が地域から出たものではなく、お国の命令によったことは誰もが知るところだ。これまで町ごとに知恵をしぼり、さまざまな試みをしてきた。地区に応じたかたちでの試みであって、だからこそ仁尾の場合のように、目をみはるような町づくりが実現した。
　町役場はプランがつくれるが、「支所」はおおかた管理業務にとどまるだろう。広大な新市域のなかで、半島の根かたは足だけでなく目も届かない地域になりかねない。そこを「行財政改革大綱」という張子のトラが見張っている——。
　運河から水路が分岐するかたわらに石碑が建てられていた。
「人形芝居発祥地　叶座跡」
　賀茂神社境内に隣合って人形芝居の劇場があったのだろう。すぐ奥まったところに神さびた建物が見えた。扉のスタイルから三方の縁側にひらける構造をとっている。中は全面床になっていて、「長床神事」の催される舞台だという。むかしエライ人が訪れると、町の人は古式による献立表でもって山海の珍品を用意した。長老たちは謡いでもって、酒宴にてコトほいだとか。いまも一月の第二日曜日に古式どおりに長床神事が披露される。
　そんな掲示にうれしくなって、再び旧地区に入りこんだ。
「Ｏｌｄ＆Ｎｅｗ　なかんちょ　懐かしのストリート」
　町の魅力を宣伝しようと、グループが考えた。「なかんちょ」とよばれている通り

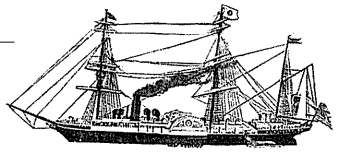
で、しっかりした様式をもつ家々が、それぞれ歳月の味わいをみせて並んでいる。黒ずんだ塀に一字が大人の背丈ほどのレリーフで「製菓一原堂」。塀だけあって中は空地なのは、店が取り払われたのだろう。古い時代の奇抜な広告が不思議な美的オブジェの陰影をおびている。とびきりの「往来芸術」というものだ。

城跡の石垣をまわりこむように歩いていたら、稲荷社の前に出た。雄大な台座に大きなおキツネさまが二匹、悠然と控えている。まっ白な顔と四肢、耳がピンと立ち、耳の内側が血のように赤い。左のキツネは神妙な顔つき、右のキツネはつき出た口に鍵をくわえている。鉄製の鍵は精巧につくられていて、先っぽが「知恵の輪」のような形をしている。

もしかすると古人が子孫繁栄にことよせて、託したのではあるまいか。難局に直面すれば、キツネの知恵をふるってのりきるべし。そんな目で見上げると、左のキツネが神妙な顔でうなずいた。

（いけうち　おさむ）

城跡下の おキツネさま



連載Ⅱ
岩倉使節団
に嵌まって30年
第６回（最終回）

「現代語訳」の出版、ＤＶＤの制作、そして「国際シンポジウム」

ノンフィクション作家
米欧亜回覧の会 代表
泉 三郎

『米欧回覧実記』の現代語訳出版

岩倉使節団の旅の記録、『米欧回覧実記』は、漢字とカタカナだけからなる文章で、学校で漢文を習った戦前世代ならともかく、戦後世代にはまず歯が立たない代物である。そこで、これをなんとか現代語訳にしたいという声は早くからあった。しかし、全五冊、二二〇〇ページに及ぶ詳細な記録を現代語にする作業は気の遠くなるような仕事であった。

しかし、その重いお尻をたたく事態が発生した。というのは、その英訳本全五冊がひと足早く出版されたのだ。私たちは大いに刺激された。この日本の古典的旅行記を外国の人が読めるというのに、日本の若者が読めないというのでは道理にあわない。我々としては、ある種の使命感も感じざるを得ず、有志が数人で分担し現代語訳をすすめようという話になった。その中心人物はノンフィクション作家でフリーの編集者、水澤周氏である。はじめ、正木孝虎氏、小林養丈氏、石川直義氏、坂内知子氏、小菅心子氏らが分担して訳業を試みたが、間もなくこれは水澤周氏の単独作業にすべきであることがわかった。博覧強記で百科全書的知識のある水澤周氏は、この仕事にうってつけの人物だった。水澤氏はそれから一〇〇〇日余、たゆまぬ努力をつづけ、とうとうその事業を完成する。そして慶應義塾大学出版会より全五冊の立派な本として刊行されることになったのである。

ＤＶＤ『岩倉使節団の米欧回覧』の制作

また、スライド映像についても、早くからビデオにすべきだという話があった。使い勝手の面でも、フィルムの劣化の面でも、デジタル・ビデオにすべきだというのだ。しかし、先立つものがない。そこで当会の設立一〇周年記念事業の一つとして会員から特別賛助金を仰ぐことにし、さらには財団の東京倶楽部からも支援をうけることができた。

そこで制作担当の足立光正氏と私とのコンビで作業が始まった。まず、シナリオを作り、資料を収集し、映像の修正をする。そして著作権、肖像権、版権の処理、そのクリアが骨の折れる仕事だった。幸い知り合いの編集者宮川木末氏の協力を得て道が開けた。

ナレーションはプロに依頼する案もあったが資金的制約もあり、結局私自身がやることになった。映像の修正デジタル処理、音楽など全体の構成・監督は足立氏の仕事で、いつもの馬力で精力的な作業がすすんだ。そして、遂に九章からなる一六五分の作品が完成し、慶應義塾大学出版会からリ

リースされることになった。その試写会は二〇〇六年八月二十六日、日本記者クラブの主催でプレスセンターのホールで行われ、好評を博すことができた。

国際シンポジウム「世界の中の日本の役割」を開催

これより先、二〇〇四年に、「米欧回覧の会」は特定非営利活動法人（ＮＰＯ法人）になった。そして同時に「米欧亜回覧の会」と名称を変更した。「米欧」だけの視点ではなく、この際「亜」をいれてグローバルな会にしようという意図だった。「亜」には、アジア、アラブ、アフリカの意味をふくんでいる。

そして二〇〇六年十一月、会の設立満一〇周年記念行事として、国際シンポジウムを開くことになった。テーマは「世界の中の日本の役割―西洋近代文明を超えて」である。岩倉使節団を扱っているとおのずからテーマは大きくなる。目標は国家的スケール、物差しは一〇〇年単位、視点は世界にひろがる。

前回の国際シンポジウムでは「岩倉使節団と米欧回覧実記」に焦点をあてたが、今回は三つの柱を立てた。それは「米欧亜回覧の会」がここ一〇年やってきたことの集大成を意味し、「読む会」、「歴史部会」、「現未来部会」に対応し、「岩倉使節団」、「近代史」、「未来ビジョン」の三つのセッションで展開することになった。そして、五百旗頭真氏を中心に、芳賀徹氏と松本健一氏をアドバイザーに委嘱し、幹事役の山田哲司、藤原宣夫、井出亜夫氏らを中心に事はすすむ。ゲストは主にアジア諸国から招き、「亜」からの視点で論じあうプログラムができあがった。こうして、国際シンポジウムは十一月二十二日から二十四日までの三日間にわたって、延べ六〇〇人を超す参加者を得て盛大に実施された。

それは会としての一〇周年を、そして私個人としても「岩倉使節団に嵌まって三〇年」のよき記念行事となった。さて、これからどうなるか、神のみぞ知るというべきであろうか。

（いずみ　さぶろう）

1870年代の大視察旅行を再現したＤＶＤ『岩倉使節団の米欧回覧』

連載Ⅲ
ホスピタリティの
手触り42

外資系リョカンがやって来る

旅行作家
山口 由美

いまや「リョカン」はポピュラーな日本語？

私が連載コラムをもっている雑誌のひとつに『月刊ホテル旅館』がある。文字通りの業界誌なのだが、ここに記事を書くということで海外のホテルとやりとりしていて、面白いことがあった。

私は、深く考えもせず、雑誌の英語名を『Hotel&Ryokan』としていたのだが、ある時、何気なく雑誌の表紙を見たら、小さく『The Hotel Management』とあるではないか。ならばと思い、正式の雑誌名を書いたら、日本でホテルのPR窓口を担当する方にやんわりと言われたのだ。

「あの、『ホテル旅館』のほうが先方の印象がよろしいかと」

「えっ？」

「こう言っては何ですが、『ホテル・マネジメント』ですと、退屈な専門誌だと思われてしまいます。でも、リョカンが入っていると、時代の先端というか、かっこいい印象があって、対応が全然違うと思うんです」

かっこいい？

目からウロコが落ちた気がした。早速、ことの顛末を編集長に話すと、彼女も目からウロコが落ちたらしく、なんと数カ月後には、雑誌の英語名が『Hotel&Ryokan Management』になっていた。ほんの一年ほど前の出来事である。

ふと気づいてみれば、日本在住の外国人のみならず、海外のホテル関係者や旅に興味のある人たちの間でも、いまやリョカンは、スシ並みにポピュラーな日本語になりつつある。ひと昔前のように、ジャパニーズ・インだの何だの、まどろっこしく説明する必要なんてない。リョカンと言えば、理解するし、理解するばかりでなく、かっこいいとも思うらしいのである。

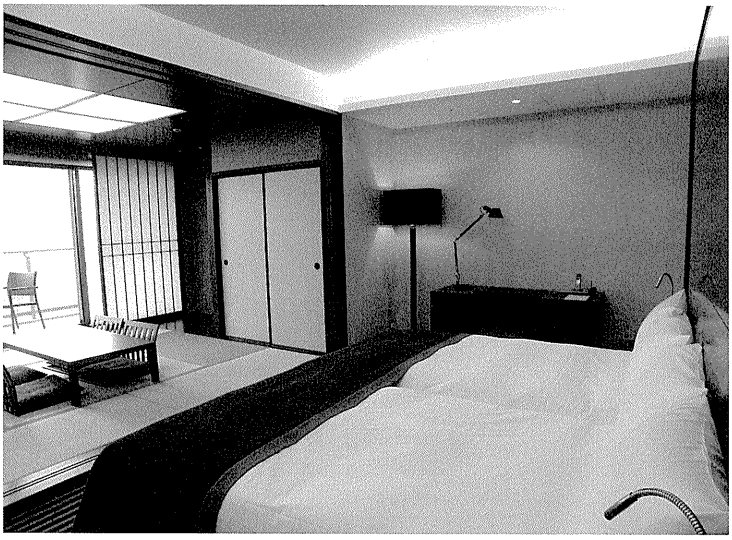
今、外資系ホテルの日本進出が話題を集めている。だが、それはホテルの話で、旅館は関係ない、と思ってはいないだろうか。確かに、昨今の景気回復を受けて、一部の勝ち組旅館は、半年先、一年先まで予約が埋まって、わが世の春を謳歌している。だが、そうしたマーケットに黒船が襲来、なんて話があるかもしれないのだ。

業界関係者が、注目しているひとつが、京都に計画中というアマンリゾーツだろう。アジアを中心にスモール・ラグジュアリーというリゾートホテルの一ジャンルを築き上げた、あのアマンが、ついに日本に進出する。

詳細は、まだ人の噂に聞くくらいだが、

もともと旅館を参考にホテルの運営を考えたといわれるアマンである。日本上陸となれば、当然、リョカンというスタイルを意識しないわけはない。

昨年末、箱根にオープンしたハイアット・リージェンシー箱根も、畳のリビングルームがある客室、温泉大浴場など、リョカンのテイストを随所に取り入れたホテルとして話題になった。総支配人に女性を起用したのも「女将」を意識してのことと聞く。


ハイアット・リージェンシー箱根の客室

今のところ、このハイアット・リージェンシーが、箱根で皆が恐れる黒船になっている様子はない。しかし、このホテルのもつ意味は、日本の温泉、リョカンというスタイルが、インターナショナル・スタンダードとして世界に広く認識されることにあるのではないか。もちろん、それは世界からの集客という「ようこそジャパン」な効果も生むだろうが、同時に、新たなリゾート出店を狙うホテルチェーンにとっての情報にもなる。

そうした効果のひとつだろうかと思ったのが、先日、東京ミッドタウンにオープンしたザ・リッツカールトン東京の開業記者会見におけるCEOの発言だった。

日本におけるリッツカールトンの出店計画を問う質問に対して彼は言った。

「まず京都、それから福岡。そして、いろいろ難しい問題があることは承知ですが」と前置きしてあげたのが、箱根だった。さらに彼は「リョカンという形態にも興味があります」と言ったのである。

「ザ・リッツカールトン・リョカン・アット・ハコネ」なんて宿が近い将来、出現しないとも限らない、ということか。

かねてから私は、アフリカのサファリロッジと日本の旅館が似ているという話をしてきた。食事付きの料金を基本とし、サービスの形態に決まりごとが多く、仲居さんやレンジャーという専属の担当者がつく、従来のホテルとは異なる独自のスタイルが似ていると思うのだ。アフリカでもじつは今、日本の温泉ブーム並みに、ホテルブームがあって、雨後の筍のようにロッジがオープンしている。

だが、そこに外資系企業の参入はない。評判のいいロッジを運営するのは、南アを中心とした地元資本の企業ばかりなのだ。サファリロッジというのは、何しろゾウやライオンが相手だから、レンジャーの教育など独特のノウハウを必要とする。一朝一夕に外資系の参入は難しいのだろう。

それに比べると、旅館のノウハウは容易に学べるということなのか。外資系ホテル進出の二〇〇七年問題の次には、外資系リョカンの進出が話題になるかもしれない。

（やまぐち　ゆみ）

旅の図書館

新着図書紹介

ホイチョイ・プロダクションズと聞いて何を想起するだろうか。バブルっぽい世の中になると俄然元気度を増すクリエイター集団。『ビッグコミックスピリッツ』誌上最長を誇る連載漫画『気まぐれコンセプト』、スキーブームの火付け役となった映画『私をスキーに連れてって』。それとも、トークと音楽を組み合わせたTOKYO FMのラジオドラマ風番組『サントリー・サタデー・ウェイティング・バーAVANTI』。わたしの場合は、番組予告もなく深夜に突然放映されたフジテレビの番組『上品ドライバー』である。

前置きはさておき、そのホイチョイ・プロダクションズが真面目な本**『「エンタメ」の夜明け――ディズニーランドが日本に来た！（ホイチョイ・プロダクションズ 馬場康夫著、講談社）』**を出した。

最初に言っておくが、本書はれっきとしたドキュメンタリーである。不思議な因縁で結ばれるのは日米三人のプロデューサー、とまえがきに記されているが実際は、小谷正一氏、堀貞一郎氏の二人を軸に、日本のエンタテインメント・ビジネスの草創期が振り返られる。

小谷氏は毎日新聞事業部長として、日本プロ野球パシフィック・リーグの創設にかかわる。その後、日本最初の民間ラジオ放送を興し、電通のラジオ・テレビ局長を務め、大阪万博では複数のパビリオンのプロデュースを手がけた人物。堀氏は電通時代の小谷氏の部下。一九六〇年代のテレビのヒット番組『シャボン玉ホリデー』や『11PM』の立ち上げにかかわり、万博では小谷氏の右腕として活躍。後に東京ディズニーランド浦安誘致を実現させた（東京ディズニーランドの生みの親といわれるのは漁業権補償問題の専門家としてオリエンタルランドに入社、後に社長になった高橋政知氏）。

話のスタートは一九七四年十二月。三井・三菱という日本を代表する企業グループの、ディズニーランド日本誘致に向けての攻防。当時、三井不動産の関連会社、オリエンタルランド常務に出向していた堀氏が仕掛けた「史上最大のプレゼン」場面である。

よくあるストーリー展開ではあるが、その後話は終戦直後までさかのぼる。破天荒で、イザとなればインテリ・ヤクザぶりを発揮して関西弁で凄む、それでいて人の心を摑む天才・小谷氏の数々のエピソード。一七歳年下の堀氏との出会い。そして、「万博の次はディズニーランド」が二人の無言の合言葉に…。伝説の男たちの生きざまに加えて、活気溢れる「夢」見る時代の文化や風俗も随所に綴られる。楽観主義？　のホイチョイらしく、高度成長期の負の部分や貧乏臭い「四畳半フォーク」的な話はあくまで脇役である。

本書は、堀氏を軸にして読めば、東京ディズニーランドがいかにして出現したかがテーマとなる。他方、小谷氏を軸にして読めば、日本のエンタテインメント・ビジネス草創期の人間関係や広告界の歴史が浮かび上がってくる。常に新しい試みにチャレンジする小谷氏の姿は、毎日新聞の同期入社だった井上靖氏の芥川賞小説『闘牛』などのモデルともなった。井上氏に限らず、数多くの人物が登場するので、途中で人物相関図を書きはじめてしまった。

余分な作業はあったが、久しぶりに興味深いドキュメンタリーに出合ったという気がする。

（中村　功）

四六判　229ページ
定価　1,470円
講談社

財団法人　日本交通公社　出版物のご案内

■定期刊行物

●旅行年報（年更新、毎年九月発行）
過去一年間の旅行に関する動向と展望をデータ中心に解説。

●旅行の見通し（年更新、毎年一月発行）
今年一年間の国内旅行・海外旅行などの量的見通しと質的変化。

●旅行者動向（年更新、毎年七月発行）
国内・海外旅行者の意識と行動について実施する当財団「旅行者動向調査」の分析結果をビジュアルに解説。「二〇〇六」では、「団塊ジュニア」「リピーター」「温泉ニーズ」を特集。

●観光文化（年六回、奇数月二〇日発行）
旅や観光の文化に関する当財団の機関誌。

●Market Insight（日本人海外旅行市場の動向）
（年更新、毎年七月発行）
日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。〇六年より発行。

■観光読本（二〇〇四年六月発行）
東洋経済新報社の読本シリーズ。一九九四年の初版刊行から一〇年を経て、内容を大きく見直した改訂版。観光全般に関する客観データや現象を解説。またそれらに基づく分析・提言など。

■その他刊行物

●美しき日本
日本の美しい観光資源を紹介する写真集。わが国を代表して世界にアピールでき、わが国の基調となる観光資源三九一件を選定し、写真と解説文で紹介。外国語版（英語・中国語・韓国語）"Beautiful Japan"も発行。

●エコツーリズム　さあ、はじめよう！
エコツーリズムを目指すすべての人に向けて環境省が編集し、当財団が発行した手引き書。

※刊行物に関する問合せ、冊子をお求めになりたい方は
財団法人日本交通公社　観光文化事業部まで。
電話：〇三・五二〇八・四七〇四　http://www.jtb.or.jp

次号予告

●次号の特集は「仏教ルネッサンス――お寺と社会の縁起再生を考える（仮題）」です。観光もお寺も"人々の交流"によって、その存在意義が高められます。

調査研究だより

●本号からスタートするこのコーナーは、当財団の調査研究プロジェクトの概要についてご紹介していきます。

●一九六四年の株式会社日本交通公社の分離と同時に始まった調査研究事業は今年で四三年目を迎えました。

●受託調査が本格的に始まったのは一九七〇年代に入ってからです。当時の建設省道路局の委託により実施した「観光交通資源調査」は、日本全国の観光資源の評価を試みたものであり、その後観光振興計画策定の基礎的資料として幅広く活用されました。現在では優れた資源を写真集『美しき日本』として刊行しています。また、一九七八年から二カ年をかけて当財団の全研究員が総力を挙げて取り組んだ『観光の現状と課題』は今でも観光分野のバイブルともなっています。

●二〇〇一年からは公益事業の柱として自主研究に力を注ぎ、数多くの研究テーマに挑戦し、その研究成果は『自主研究レポート』や日本観光研究学会などに発表してきました。

●近年は観光政策への期待の高まりと相まって、国土交通省をはじめとする国からの受託調査が増加しています。次号以降、ご期待下さい。

編集後記

"いつの間に昭和は遠くなりにけり"

◆四月二十九日の祝日の名称が今年より「みどりの日」から「昭和の日」に改称。昭和も歴史的な一時代となりました。

◆昭和を戦後日本から見れば、その出発点はヒロシマと考えます。日本は唯一の被爆国として核廃絶を訴え、平和国家として国際社会に貢献することを世界に誓いました。広島平和記念資料館を運営する財団法人広島平和文化センター理事長に米国出身のスティーブン・リーパー氏がこのほど就任されました。観光の礎も平和にあります。ヒロシマから発信される平和のメッセージが世界に一層普及するよう期待されます。いつの日かサミットが広島で開催されることを願ってやみません。

◆昭和三十年代が今、熱い注目を浴びています。昭和三十三年に開業した東京タワーはまさに庶民の夢を育んだ昭和のヒーローといえるでしょう。明年、開業五〇周年を迎えます。

◆昭和の街並みを生かした地域おこし、まちづくりが展開されています。昭和の庶民文化の魅力の源泉は何処にあるのか、串間氏に『ニアレトロ』という視点から分析していただきました。

◆昭和という時代を次の世代に語り継がねばなりません。

（宇八）

観光文化　第183号

第31巻3号通巻第183号

発行日2007年5月20日

●

発行所：財団法人　日本交通公社
東京都千代田区丸の内1-8-2
第1鉄鋼ビル
〒100-0005　☎03-5208-4701
http://www.jtb.or.jp

編集室：東京都千代田区丸の内1-8-2
第2鉄鋼ビル　旅の図書館内
〒100-0005　☎03-3214-6051
http://library.jtb.or.jp

編集人：外川宇八

発行人：新倉武一

●

印刷所：ＪＴＢ印刷株式会社

禁無断転載

ＩＳＳＮ　０３８５-５５５４